

忘れ語り、いま語り

表わすこと、または創ることの、はじまりの現場へ

コロナ禍が始まった年であったか、アール・ブリュット展「満天の星には、創造の原石たちも輝く」という特別展のために、執筆した文章である。編集者からはやんわり「理解できない」と拒絶されたが、掲載しなくてもいいから書いておきたいと思い、書いた不思議な文章であった。深い思い入れがあり、ここにあらためて掲載してみることにする。ちなみに、(3)の主人公の彼には再会を果たしました。絵はいまも描き続けています、と抗議されましたが、とても嬉しい再会でした。

☆

(1) はじまりの絵について語りましょうか

トイレの壁に、指先についたウンチで絵を描きました。
それが、記憶のなかの、わたしが描いたはじまりの絵なのです。
いくつかの線が交叉して、かすれ、指のウンチは尽きました。
むろん水洗ではなく、くみ取り便所だったのです。
床の木目には、なにかが潜んでいて、ときおりそのささやく声を聴きました。
トイレはやはり、異界への通路であったのかもしれない。
まだ五歳くらいの幼な子でありました。
ウンチの匂いはいまも、指先に、なつかしく残っています。
ときおり、あの描きかけの絵を思い出します。
なぜ、幼いわたしは叱られなかったのでしょうか、壁を汚したのに。
はらかな昔、洞窟の壁に描かれた獣たちの姿と、残された手の跡。
絵とはなにか、絵を描くとはいったい、どういう行為なのですか。
絵描きにはならず、民俗学者になったわたしは、そんな問いからは巧みに逃れてきました。

(2) 黒い土をこねて、海の底をのぞきました

わたしは武蔵野の台地に育ちました。
そこは畑と雑木林、そして野原の世界でした。
土ぼこりが舞ったのは、夏でありましたか。
雨が降ると、水たまりができて、アメンボがどこからともなく現われました。
手や棒で地面を掘ると、三十センチほどで赤土になりました。
その手前の黒い土が、子どもらの友だちだったのです。
黒土をこね、水を混ぜ、まあるいダンゴをいくつも、いくつも作りました。
そんな土の感触はいまも、てのひらの内側に残っています。
気がつくとき、土のむせる匂いも鼻先にあって、ずっと忘れていた匂いです。
庭の隅っこには、雑木林で見つけた大きな貝の化石が、半分に欠けて転がっていました。
そう、友だちと分けっこしたからです。
この土がきっと、海の底に沈んでいた時代があったのです。
だから、土をこねる人に会うと、話しかけたくなるのでしょうか。
蒼いみなそこに、命がけで土を採りにいったカブトムシがいたんですよ。
どこだかの、遠い国の、いにしえの物語だとか。

(3) わたしはだれですか、と助手席のほそい声がありました

その子はそのとき、二十歳になったばかりでした。
男でも女でもなかったのです。
淡いラインと色合いの、消え入りそうな、葉書よりも小さな絵を描いていました。
はかなく、無心で、見るものを畏れと憧れで揺さぶりました。
あらゆる定義や名付けから、そっとこぼれ、逸れてゆくような絵だったのです。
やがて、その子は性を選びました。
男になったのです。
かれの描く絵からは、はかなげな線と色が失われていきました。
そして、いつしか絵を描くのをやめてしまったのです。
かれはいま、うすく無精髭をはやした、中年の男です。
最近、車のイラストを描いている、と聞きました。
見せてもらったことは、ありません。
知らぬ間に、性を選ばせるがわに加担していたことに気づきました。
それが色のない暴力であったことに、いまも、おののくことがあります。

(4) なぜ、落ち葉に惹かれるのでしょうか

秋、地面に散り敷かれた落ち葉を見かけると、気もそぞろになります。
落ち葉に呼ばれます、呼ばれています。
そっと身をかがめて、拾うと、ポケットにしまうのです。
たいてい、そのまま忘れてしまうのですが。
まれに、文庫本の葉になっているのを、あとになって見かけます。
はかなく、壊れやすい、まるで永遠の否定でも企んでいるかのように。
無用であるから、それは無償の贈与でもある、ということですか。
だから、枯れ葉が獣に姿を変えて、こちらを振りかえったとき。
思わず、かすかな歓びに震えました。
打ち棄てられてゆくものに、いのちが吹き込まれたのですから。
いま、小箱のなかに身をひそめているのは、犬と象です。
いつか、お見せしましょうね。
その繊細な姿態を前にして、ひとの手わざの不思議に打たれます。
あなたは、どんな指をしているのですか。

(5) 数字にあらがうための招待状を差しあげます

放射能という、形も色も匂いもない暴力と出会いました。
この世は、見えないモノたちに満たされていることを知りました。
鈍いのね、そんなことも知らずに、これまで生きて来たなんて。
そう言って、笑ったのは年若いカナリアでした。
けれども、数字によってしか、その見えない暴力は確認できないのです。
どうやら、世界は数字に支配されているようです。
あなたの話には数字が一度も出てこなかった、ポエムですね。
どこか大企業の社長さんに、そう憐れむように、さげすむように言われました。
わたしは数字をもたない人間なのだと知りました。
数字の対極には、詩や絵画や音楽の王国があるのでしょうか。
わけのわからないことばかり。
不安はいつだって、数字に置き換えられます。
そうして、世界は手なづけられた現実によって覆われてゆくのです。
現実こそが、はかない夢ではありませんか。
ポエムやアートは、数字にあらがいます。
現実を超えようとして、カナリアのようにさえずります。
現実は思いがけず、いくつもの顔を、いくつもの表情をもっているのです。
だから、表わすこと、創ることがはじまる場所に、眼を凝らしています。